

教育実践報告

「心をつなぐドラムサークル」講座実践報告： 松本大学教育学部と長野県総合教育センターによる 共催講座開設の試み

安藤 江里・小町谷 聖

An Activity Report for an Extension Course Entitled “Bonding Hearts in a Drum Circle”:
A Joint Project Involving Matsumoto University
and the Nagano Prefectural Education Center

ANDO Eri and KOMACHIYA Kiyoshi

要 旨

本年6月、松本大学教育学部と長野県総合教育センターの初めての共催講座「心をつなぐドラムサークル～リズムで育てるコミュニケーション～」が松本大学において開催された。講師にREMO社公認ドラムサークルファシリテーターの妹尾美穂氏を迎え、教員養成大学の学生と現職教員がドラムサークルを通して交流し、教育現場への活用に向けて意見交換しながらお互いにそれぞれの考えを共有した研修講座の報告である。ドラムサークルがもたらす効果は心を開放し自己表現を達成できると共に他者との非言語コミュニケーションが可能であり、体験した受講者からは大変好評であった。また学生と教員が交流する研修は減多になく貴重なものであった。

キーワード

ドラムサークル 音楽教育 教員養成と教員育成 共催講座の意義

目 次

I. はじめに

II. 研修内容

III. 受講者アンケート調査の結果

IV. まとめ

注

文献

I. はじめに

1. 共催講座の企画

長野県総合教育センターでは、県内幼稚園・小・中学校、高等学校、専門学校の教職員の研修機関として、教育界の動向を踏まえつつ、年間200を超える研修講座を開設している。他の教員養成機関と連携した講座においては、信州大学、上越教育大学(教職大学院)、長野大学とは、年間1～5講座程行っている。

今回は新しく開設された松本大学教育学部との初の共催講座を企画するにあたり、初めての試みとして、松本大学教育学部で学ぶ大学生と、総合教育センターに研修に来る教員と一緒に学ぶ機会をもつことにした。将来教員を目指す大学生が、現職教員と共に学ぶ中で交流を図ることは、そのモチベーションを高めたり、教職の仕事について考えたりする機会となる。また、現職教員にとっても教職を目指す学生の意欲に刺激を受けることも期待できると考えた。講座については、長野県総合教育センター音楽科主事の小町谷と松本大学教育学部学校教育学科の安藤の共同企画として行った。

内容としては、なかなか単独では設定が難しいが共催企画だからこそできることを、と考えドラムサークルを取り上げた。講座名は「心をつなぐドラムサークル～リズムで育てるコミュニケーション～」とした。ねらいに「ドラムサークルの理論や実践方法を知り、音楽の授業や、全校音楽、学級活動にその理論や実践を取り入れられるように考えることができる」「いろいろな人とドラムサークルを通して育まれるつながりを感じ、全員でひとつのものを即興的につくる活動を体験する」「特別支援教育・生徒指導に生かす手立てについても学ぶ」を挙げた。

日程…平成30年6月16日(土)

場所…松本大学教育学部8号館多目的室

講師…REMO社公認^{注1}ドラムサークルファシリテーター 妹尾美穂氏^{注2}

参加者は現職教員16名、学生20名、その他関係者5名であった。

2. ドラムサークル概要

ドラムサークルとは、集団で輪になって打楽器をたたき、即興的にリズムアンサンブルをつくりあげる活動を指す。参加者が一体感を感じながら即興的な音楽表現やリズムをたたく楽しさを共有することで、参加者の心を開き、協調性を促進する効果が期待できる活動である。また、ジャンベ等の外国の太鼓^{注3}を扱ったり、いろいろな音色の小物打楽器を扱い、リズムや音楽をつくっていったりする過程で音楽科の学習を深めることも可能である¹⁾。

「だれでも参加でき」「輪になって」「即興的な」「リズムアンサンブルを楽しむ」という特徴があるドラムサークルで重要なのが、輪の真ん中に立ち、ドラムサークルの活動をファシリテート(ファシリテートは物事を簡単にするという意味)するファシリテーターと呼ばれる役割である。ファシリテーターは参加者の個性を引き出し、輪の一体感を生み出しながら参加者につながりが生まれるようにしていく。この役割を学ぶことも、学校での授業づくりに生きる重要な研修となる。

II. 研修内容

1. 講義「これからの音楽科教員養成・育成に求められること」

研修の最初は、現職教員のみに対して上記のテーマに基づき安藤が講義を行った。

1) まず平成29年第48回日本音楽教育学会愛知大会のシンポジウムからの話題提供として次の3

点挙げた²⁾。

- ・ 確かな教科と教職の専門性…教員養成においては「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の枠を取り払い、教科内容と指導法を一体的、総合的に行う方向性であること。現場では、つい自分が受けてきた教育観や経験値のみで指導してしまう教育の再生産の問題、そして相変わず演奏技能の指導が中心となる中で、いかに「主体的・対話的で深い学び」の本質を捉えて子どもの創造力や表現力を引き出すかが今後の課題である。
- ・ 教職現場で求められるマネジメント力、チーム力について…各学校単位の教員組織のチーム力だけではなく、教育委員会、教育センター、大学教員、教育行政との連携、さらに地域の幼稚園、保育所、老人ホーム、公民館などとのつながりを作り上げていくことで多角的な視点を持ち、活性化させていくことが大切である。
- ・ 素直な人間性…前述したチーム力やマネジメント力を発揮していくためには、基本的な人間性として「ありがとう」「ごめんね」が素直に言えるということが大切である。他者を受け入れる寛容性や他者とのずれをすり合わせていく協働性は音楽を通して育てたい人間像とも共通しており、学校音楽教育の意義にも通じる。

2) 次に平成29年告示新小学校学習指導要領の目標設定の3つの柱から「学びに向かう力・人間性

等」の涵養について挙げた³⁾。音楽科においては「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情～」「楽しく音楽活動に関わり、協働して音楽活動する楽しさを感じながら～」などの文言が新しく謳われている。音楽という教科の特性を生かしていかに楽しい音楽活動を経験し他者と協働して共鳴・共振する感動を味わい、主体的・対話的で深い学びに導くかを考えていく必要がある。子どもにとって(大学生にとっても)楽しいことは遊びであって当然である。音楽遊びやわらべうた遊びを十分に取り入れることが有意義である。そして自分の身体で体感することが大切であり、また他者と協働的に試行錯誤する過程が重要である。対話とは言語活動のみならず身体、音、音楽でも対話できるのである。出来栄の良い演奏を求める前に、模倣から即興、そして創作、表現に至るプロセスを教師がしっかり価値づけていく必要がある。決して「音楽」が「音が苦」にならぬよう我々は導かなければならない。

3)最後に今回の共催講座にも参加する松本大学教育学部の学生の実態と、安藤が実践している取り組みについて紹介した。学生はやはり教科の特性として音楽経験の差が大きく、半数近くが楽譜を読むことには抵抗感があり、演奏技能に苦手意識を持っている。しかし、わらべうた遊びや常に歌いながら身体活動を取り入れて音楽に身体が乗る感覚を養い、難しいことは考えずに友と一緒に楽しむことを優先にしている。聴いたリズムを模倣したり動きで表現していくことで少しずつ自信を取り戻し、みんなで創り上げる楽しさを経験させている。その際、最終的に出来上がった形もよいのだが、そこに至る過程で起きていることをしっかり受け止め価値づけて学生に伝えていくことを大切にしている。音楽専科ではなく低学年の担任であればその、子どもにどんな音楽活動を提示できるかを考えるきっかけにしてほしい。



図1. 講義の様子

2. 演習「やってみよう!!ドラムサークル」

1) 準備

続いて講師に妹尾美穂氏を迎え、ドラムサークルのための準備から行った。楽器の運び入れ、椅子の並べ方、楽器の配置の仕方など、詳しく教えていただいた。他者との距離感(パーソナルスペース)をどの位とるかは人間関係の程度によって異なり、互いに心地よい距離感について教示いただいた。



図2. 椅子の並べ方 距離感

ドラムサークルのサークルとは文字通り輪を意味するが、これは平和の象徴であり誰もが平等に参加できる利点がある。人数によって一重または二重の円をつくり4つのセクションに分割して人が通れるくらいの間をあける。

楽器配置については低音を担当するトゥバーノやバスドラム^{注4}を各セクションの端側に、倒れやすいジャンベはその内側に配置し、4つのセクションに均等に楽器が配置されることが望ましい。妹尾氏によるとドラムサークルの環境をどのように設定するかが8割がた成功の鍵を握っており、その詳細を知ることは教師にとって非常に有用な視点であった。午前中は教員のみ20人程度で一重の輪で行った。

2) ドラムサークル開始

そして自分がたたきたい打楽器を選んで位置

に着き、いよいよドラムサークルの開始である。



図3. ドラムサークル開始

はじめは一人一人が自由にどんな音が出るのか試しながらたたいていたが、自然と低音楽器の刻む拍(ビート)を全員が共有していった。そのビートに乗って一人一人好きなリズムでたたき続け、ファシリテーターの合図で低音楽器のみになったり、「お好きにどうぞ」の合図で再び全員でたたいたりする。演奏者の範囲を指定し互いを聴くことで相手を意識できる。特に強くたく回数を示されると全員がそろってその数をたたく。ファシリテーターのちょっとしたジェスチャーで強弱の変化や速さの変化をも察知して反応する。「ドラムサークルをやったことがある人」「初めての人」「男性」「女性」「パンが好きな人」「ラーメンが好きな人」など、自分が該当すると思ったらトレモロ(連打)で盛り上げ、最後は全員でそろって終わる。ほんの10分足らずですでに会場全体の人笑顔で一体感を感じていた。「楽しい」「本能が目覚める」「まだ緊張している」「自分が支えている役割を感じる」などの一人一人の感想が述べられ、必ず拍手で受け入れられ次第に打ち解けた雰囲気になってきた。

3) ユニバーサルキュー

ファシリテーターが行うユニバーサルキューにはいくつかルールがある。アテンションキュー(アイコンタクト)、演奏を続ける合図として両

手を糸巻きのように回すコンティニュー、手の平をひらひらさせて連打するランブル、指を4本から3、2、1ストップの合図、両手を広げてアップダウンさせることでボリューム(強弱)の変化やテンポの変化をリードすることができる。そして全員が自由にたたける合図が「お好きにどうぞ」という言葉である。ファシリテーターは合図を送りたい相手と必ずアイコンタクトを取り、演奏後も親指を立てて「グー」のサインを送る。一人一人が自分の存在を認められるのだ。ちょっとしたハプニングも即興上の楽しい要素となって笑いに包まれながら間違え心配なしに受け止められていくのだ。



図4. ユニバーサルキュー

4) シェーカー

午前中の最後は打楽器以外のエッグシェーカーを使ったアクティビティを紹介していた。エッグシェーカーを隣の人へ渡す時も、相手を意識し丁寧に渡す。やはりビートに乗って落としたり渡し損ねたりするハプニングも楽しみながら、みんなで創作的な動きを取り入れる活動を体験した。

教職員の参加者が準備段階からドラムサークルの基本的な要素を体験し、ドラムサークルの教育的意義やファシリテーターの役割を学んだ。

3. 演習「体験!!!リズムでつながるドラムサークル」

1) 学生と共に

午後からは学生も参加しての実践である。人数が40人に増えたので、円を二重にして椅子を配置し直した。楽器も太鼓のみならず、小物楽器として振って音が出る楽器(シェーカーやマラカスなど)、木でできた楽器(木魚、カスタネットなど)、金属の楽器(トライアングル、鈴、小さなグロッケンなど)を配置した。講師が音の出るおもちゃのフライパンや様々な小物楽器を提示してくださり、一つ一つみんな違う音色の組み合わせが興味を誘う。



図5. 学生と一緒に

2) 様々なアクティビティ

楽器の種類が増えた分、同じ種類の楽器のみで演奏したり、セクションごとに分けられたり、男女で分けられたりとバリエーションが増えてきた。自分以外の楽器の音色にも耳を傾け、そこで新たに感じたことが積み重なっていくのかもしれない。

円の中心でファシリテーター役が様々な合図を送るが、身振り手振りだけではなく、男女がわかるカードを提示したり、フラフープの中に小物楽器を置きファシリテーターが移動して演奏楽器を示すなどの工夫が見られた。このファシリテーター役を参加者が体験していき、自分の

出した合図でいかようなアンサンブルも作り出すことが可能になることを体験した。授業者として前に立ち子どもたちと向き合う180度の関係ではなく、円の中心に立つことは360度見られているのだ。妹尾氏の言葉によると「背中にも目を持つ」感覚で、常に周りを意識することになる。



図6. 小物楽器を使って

学生はほぼ全員ドラムサークルは初めてで、何が起ころのかワクワクしている学生と少々緊張気味の表情を浮かべる学生がいたが、その場の独特な波に吸い込まれ早くも馴染んでいき、「楽しい」と笑顔に変わっていく。間違いのない世界でみんなが笑顔、そして自由と一体感がある。自分がファシリテーターとして円の中心に立てば、みんなが笑顔で注目してくれる。自分の出した合図に相手が反応してくれる快感にはにかみながらもつながりや喜びを感じる。

その他全員でビートに乗って楽器を置いたまま席を移動して色々な楽器に触れる体験や、1から8までの中で好きな数字を思い浮かべ、その拍でたたき、次第に増やしていくエイトカウントのアンサンブルなど、様々な手法の中で違うアンサンブルを体験することができた。楽器を使わず指を1本ずつ増やしていくことで強弱を表現できることも体験し、新しい感覚を得た。それぞれのアンサンブルが終了するごとに、一瞬の静寂の後大拍手が起こる。同じ鼓動を感じて

いるのだ。

3) グループ活動

全員で体験した後、5人程のグループになり、それぞれの中で全員がファシリテーター役も体験した。実際に手を上下させたり終了の合図を送ったりと、見ている分には簡単そうだが、実際やってみると恥ずかしさやタイミングに迷いも生じる。しかし全員が何をしても受け止められるため、他者が何をどのようにしているか動きを含めてよく観察する。学生も教員も距離間が縮まり自然とコミュニケーションが深まっていった。



図7. グループ活動

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうが、気づくとファシリテーターも参加者もかなり長い時間リズムに乗って動くので全身汗だくになり熱気がこもる。休憩時間もまだ触っていない楽器に触れたり、講師の言葉や感じたことをメモに取ったり、ふと集まったメンバーで即興アンサンブルが始まったりと、かなり打ち解けた雰囲気楽しんでいた。

4) トーンチャイム

最後は雰囲気が全く異なるアンサンブルであった。部屋の照明を落とし、オーシャンドラムによるゆったりとした波の音に誘われ、そこに小さな鐘の音と太鼓の音が重なる。みんなで深呼吸し、思わず目を閉じて瞑想したくなる雰囲気である。

無拍の中で自由に自分の音を重ねる。あちこちでいろんな音が聞こえてきて、突然ポーンと飛び出た音に呼応するかのようにざわざわと動き出す。次第に太鼓の拍を感じ取りお祭りのような雰囲気に変わってきた。ファシリテーターによって次第に音がおさまって最後は再び波と鐘の音のみになる。

ド・レ・ミ・ソ・ラの5音のトーンチャイムを一本ずつランダムに配る。自分の好きなタイミングで奏でる。いろいろな高さの音が交差しまたまた異世界に入り込んだ感じである。ファシリテーターの合図で一人一人の音を1回ずつつなげたり、円を2つのセクションに分けトーンチャイムの響く余韻を楽しみながらこんな美しい音の世界をこんなにも簡単に作り出せることは一日共に時間を過ごした仲間との貴重な体験であった。途中から妹尾氏による即興のピアノも入り、何とも言えない癒される時間であった。トーンチャイムの柔らかな響きを生かしたまさに宇宙をイメージさせるヒーリングミュージックの出来上がりである。



図8. トーンチャイムを使って

当然ながら楽譜は存在せずその場に応じてできる活動なので、ドラムサークルの手法はトーンチャイムの他にも鍵盤ハーモニカや声などでも応用できる。言葉や楽譜に捕われない音による立派なコミュニケーションを体験し、普段の授業では味わえないものを感じ心が洗われたよ

うだ。

4. 研修のまとめ

まとめの時間は、前述のグループに戻ってドラムサークルの感想や教育現場でどのように活用できそうか、学生と教員によるディスカッションを行い、各グループの代表者に発表してもらった。



図9. まとめのディスカッション

〈学生から〉

- ・ 最初は何をやるのかわからなかったので自分の身体も堅かったが、だんだん楽しくなってきたり身体もリラックスしてきた。子どもたちにもぜひ体験させてあげたい。
- ・ ドラムサークルは初めてだったにも関わらず、自然とたたけて安心できた。間違えるということを意識せずに即興でも成り立つということに感動した。
- ・ 自分は何となく楽しそうだなあと思って参加したが、現職の先生方は教育現場でどのように生かすかを考えてらして勉強になった。
- ・ 好きにたたいてどうぞ、と言われても最初は戸惑ったが、みんながたたき出すと何やっても大丈夫だとわかり楽しかった。子どもたちには手拍子でもできるので取り入れたい。
- ・ 音楽の演奏としても誰もが参加できるし、コミュニケーションのツールとしても生かせることを学

んだ。

- ・音楽が苦手な子どももドラムサークルなら夢中になれるのではないだろうか。

〈教員から〉

- ・若い学生のパワーを感じながら一緒に楽しくやられて良かった。現場ではこれだけの数の太鼓をそろえることが難しいが、学校にある和太鼓を活用したり、段ボールや洗面器でもできるのでやってみたいと思った。
- ・参加した学生は意欲的で積極的でした。特別支援学校ではなかなか言葉が通じないので、ホディーランゲージが多く使われるドラムサークルはかなり有効だと思った。
- ・間違いという概念ではなく、外れた音も認める教員としての基本的なスタンスを改めて思い込ませていただいた。病院内の子どもたちは体力もなく点滴を付けていたりするが、何ができるか考えていきたい。
- ・音楽の教員として長年やってきて「こうしなくちゃ」「楽しませなきゃ」と頑張っていたつもりだったが、子どもが音楽を本当に楽しんでいないことに気づくまでに時間がかかった。教師自身も本当に楽しまなければ本物ではないのではないのか。子どもが主体的に音楽を楽しむことができるドラムサークルは素晴らしいと思う。

最後に妹尾氏からも、「ドラムサークルが果たす役割は果てしなく、まだまだ伝えたいことはたくさんある。またの機会を楽しみにし、これから日々子どもたちとぜひ音楽を楽しんでください」とメッセージをいただき終了となった。

学生も教員もドラムサークルと妹尾氏の人間性の魅力にひかれ別れを惜しんでいたが、次の機会を楽しみにすることにしよう。

Ⅲ. 受講者アンケート調査の結果

受講後、学生と教職員に次のようなアンケート調査を実施した。

ト調査を実施した。

1. 受講前、「ドラムサークル」というものを知っていましたか。
☐はい ☐いいえ
 2. 受講前、「ドラムサークル」に参加したことがありましたか。
☐はい(回) ☐いいえ
 3. 体験してみていかがでしたか。
☐楽しかった ☐まあまあ楽しめた
☐難しかった
 4. 本日のプログラムで興味を持ったのはどんな活動ですか。
 5. 「ドラムサークル」はどんな効果があると思いますか。(複数回答可)
☐リズム感 ☐即興性 ☐協調性
☐集中力 ☐創造力
☐表現力 ☐共感性
☐コミュニケーション力
☐ストレス緩和 ☐感覚統合
☐クラスづくり ☐その他(具体的に)
 6. 現職教員と学生の共同研修、交流についての感想
 7. その他、運営面の要望など、自由に感想を書いてください。
- ご協力ありがとうございました。

図10. アンケート調査内容

結果は次のようになった。考察を加えて報告する。

1. 「ドラムサークル」を知っていたか

学生で知っていたのは20名中1名(5%)のみであったが、教員は16名中6名(37.5%)であった。特に参加募集をする段階からドラムサークルについては簡単なアナウンスをしたが、知らない学生がほとんどであるのに対し、教員において

は多少知られていた。しかし全体としてはあまり知名度は高くなく、いかに貴重な体験であるかがわかる。

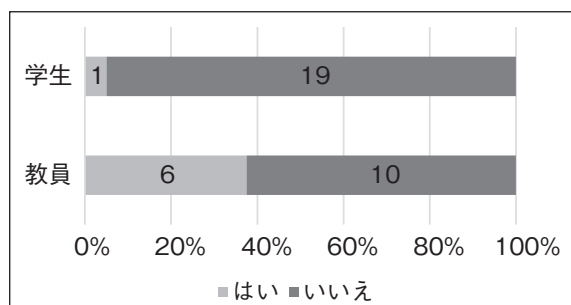


図11. ドラムサークルを知っていた人数

2. 「ドラムサークル」に参加したことがあるか

ドラムサークル経験のある学生も1名(5%)であり、知っていた学生と一致した。しかし教員は6名知っているにも関わらず、経験者は半数の3名(18.8%)であった。そのうち1名はすでに6回参加した経験があり、2名は1回のみであった。全体としてなかなかドラムサークルを経験できる場が少ないことが言える。しかし一度その魅力を知るとリピーターになる可能性もある。

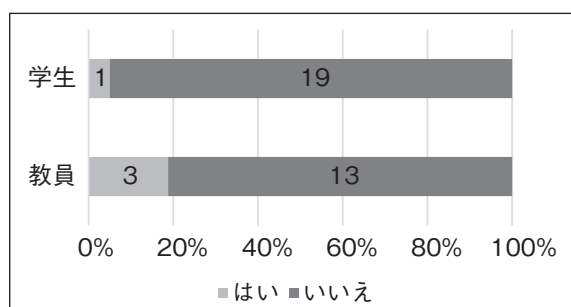


図12. ドラムサークルに参加したことがある人数

3. 体験してみての感想

学生は午後からの参加ではじめは緊張していたが最後は全員が楽しいと答えた。ほとんどの学生は初めてでその魅力を感じたと言える。

教員は「まあまあ」「難しかった」がそれぞれ1名ずついた。特にファシリテータの役や即興で判断していく点には難しさを感じる人もいよう。

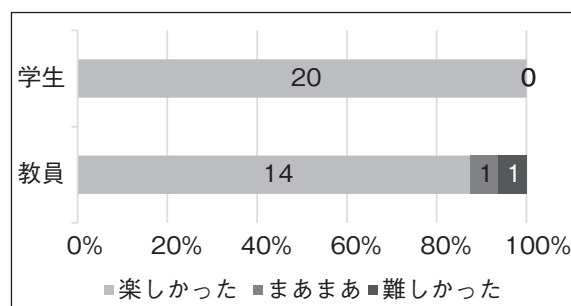


図13. 体験した感想の人数

4. 興味を持った内容は何か（自由記述 複数回答可）

この質問に対しては自由記述であり、また複数挙げられることから、ある程度同じ内容のカテゴリーごとに振り分けをした。

全体で行うドラムサークルを含めすべての活動が魅力的であり、多くの参加者が興味を持った。特に学生はファシリテーターという役割に興味を持ち、これから教員になるにあたり、中心的な役割を意識したと思われる。シェーカーゲームは午前中の教員のみの活動であった。

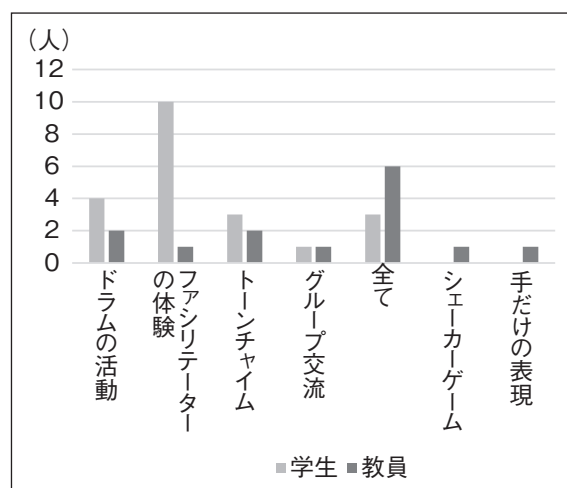


図14. 興味をもった内容の人数

5. 「ドラムサークル」の効果（複数回答可）

効果があるとして回答した延べ人数であり、ここでは細かな分析は行わないが、多くの学生も教員も協調性や共感性、コミュニケーション

力を挙げている。やはりドラムサークルを通して心がつながる感覚や他者との共鳴・共振を体験した証であろう。その他としては、「個性を大切に、考え方の違いがあってもいいことを理解する」であった。大人数の中で個人個人もその存在を尊重され、また他者とのコミュニケーションの素晴らしさも体験できるドラムサークルには様々な効果が含まれていることがわかる。

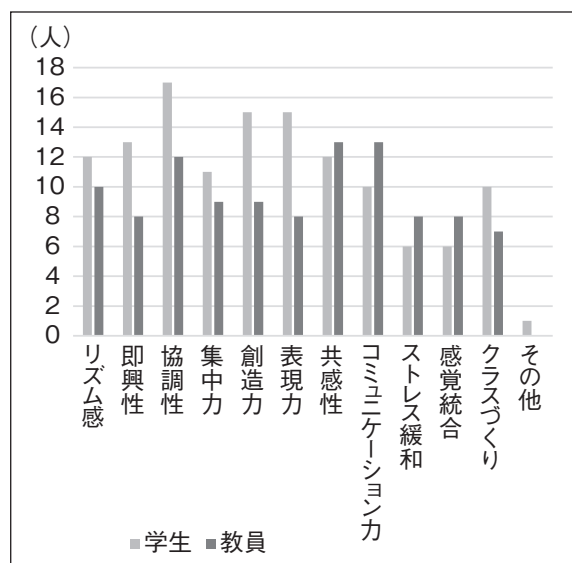


図15. 効果があると答えた人数

6. 現職教員と学生の共同研修、交流についての感想

〈学生より〉

- ・ 様々な目的を持った人が集い、みんなが互いを認め合える空間を過ごせた。
- ・ 今まで現職教員の方と会う機会が無かったのでとても新鮮だった。
- ・ 現職の先生方はとてもこやかで恥ずかしがらずに演奏されていて勉強になった。
- ・ 現職の先生方を見て将来を想像できた。
- ・ 音楽を通してコミュニケーションを取ることの素晴らしさを改めて知った。
- ・ 初めての方と言語以外のコミュニケーションが取れた。
- ・ 初めて会った年代の違う先生方と、言葉を交わさ

ずとも良い雰囲気になれて良い講座だった。

- ・ 音に対して恐怖を持つ子どもの話を聞き、やはりいろいろな子どもがいるんだなと思った。
- ・ 先生方はそれぞれ目的や課題を持って臨まれていた。常に教育に生かそうとする姿勢が勉強になった。
- ・ 学生と現職の先生方ではやはり臨む姿勢も違い、現場に生かす気持ちが違うので一緒に交流する機会も大切だと思う。
- ・ あまり会話ができなかった。もっと交流すればよかったと思ってもったいなかった。

〈教員より〉

- ・ 学生がとても意欲的で素晴らしいと思った。
- ・ 今の学生の考えや思いを知れてよかった。教員になるためにしっかりした思いを持っていて驚いた。
- ・ 若いこれからを担う学生と一緒に研修することは良いと思う。
- ・ このような交流は新しく、もっと増えてほしい。
- ・ 学生のパワフルな力や言動に学ぶことができた。
- ・ 一緒に研修することはお互い良い刺激になる。楽しかった。現場で待っている。
- ・ 学生が自分の考えをきちんと話すのすごかった。学生の反応を見ていると、自分のクラスの子どもと重なるような部分もありより現場に近い感じがした。
- ・ 普段はできないことなので貴重な機会だと思う。
- ・ いろいろな校種や年代の方と演奏できて楽しかった。特に午後は学生のパワーを感じた。

7. その他要望や感想

- ・ 大学との連携というとても良い企画だった。
- ・ ぜひこのような研修の機会を作してほしい。
- ・ 松本大学の取り組みも素晴らしく、先生方の研修も受けたい。
- ・ 素晴らしい講師、機会にで合わせていただき感

謝している。

- ・音楽に対する考え方がガラッと変わった。みんな
で楽しめる音楽を目指したい。
- ・このドラムサークルをぜひ他の人にも体験してほ
しい。
- ・参加してよかった。将来自分も活かしていきたい。
- ・現場に出たら活かせる内容がたくさんあり、本当
に楽しかったので、こういう機会をたくさん作っ
てほしい。

IV. まとめ

今回の共催講座の企画はアンケート結果から
もわかるように、学生と教員両者にとってとて
も新鮮でお互い良い刺激を受けながら交流でき
た有意義な研修となった。学生は将来像を描き
ながら先生方の姿勢を参考にし、また現職教員
は若い学生の純粋な感覚からパワーを感じ自分
に還元している。なかなかこのような機会も実
際は少ないため、要望も多く今後も期待される。

ドラムサークルは幼児から大人まで、高齢者
でも障がい者でも隔てなく誰もが平等に参加で
きる活動である。楽譜に頼らずその場に集った
誰もが自然と協調していき楽しい快感を得られ
る。その効果は参加者が実感したようにリズム
表現力や即興、創造力を発揮する自己表現のみ
ならず、他者を認め受容する協調性や非言語コ
ミュニケーション力を高める。また脳科学とも
関連してリズム運動によって神経伝達物質であ
るセロトニンが分泌され、脳の活性化と共にス
トレス緩和作用により心の安定も生まれること
がわかってきている⁴⁾。このような効果から、学
校教育においては音楽科の学習に関連付けて活
用できるだけでなく、クラス運営や学校全体で
も取り組める教育的意義を持つ。

しかし、なかなか十分な楽器をそろえること
は難しく、ファシリテーターの養成も多くはない。

ドラムサークルがアメリカから日本に導入さ

れてまだ20年未満の現状では当然かもしれない
が、今後さらに教育現場での楽器の普及と活用
が広まっていくことを期待する。そして教員養
成でもドラムサークルを取り上げより多くの学
生にも経験してもらいたい。

学生はこの講座の後も自分たちでドラムサー
クルを真似て「お好きにどうぞ」を繰り返し楽し
んでいた。ドラムサークルとの出会いにより新
たな世界観を体験できたことで子どもたちにも
伝えていきたいものとして心に残っている。

謝辞

今回は講師の妹尾美穂氏のご厚意により多数
の打楽器を手配していただき、また様々な小物
楽器での活用法も教示していただき感謝いたし
ます。

注

- 注1 REMO社はドラマーであったRemo D Belli氏(1927-2016)が1957年にカリフォルニアの地に創業したパーカッションメーカーであり国内外で活躍するドラムサークルファシリテーターと公式契約している。
<https://remo.com/>
- 注2 妹尾美穂氏についてはオフィシャルウェブサイトのプロフィールを参照。
mihopower.jp/
- 注3 ドラムサークルで使用する代表的なリズム打楽器には、西アフリカ発祥のゴブレット型をした太鼓であるジェンベやブラジル系、キューバ、その他アメリカのレモ社が開発した楽器がある。ジェンベは足にはさみ手でたたく楽器である。
- 注4 楽器に足が付いているため床に安定して置き、マレットや手でもたたきやすい低音の太鼓である。

文献

- 1) 飯田和子, 石川武, 菊本るり子, メアリー・クニッシュ共著『はじめてのドラムサークル』音楽之友社(2014)
- 2) 日本音楽教育学会第48回愛知大会, シンポジウム「音楽を教える人材とは?これからの音楽科教員に求められること」『音楽教育学』第47巻第2号, pp67-74(2018)
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編」東洋館出版社(2018)
- 4) 有田秀穂 特別寄稿「セロトニンとリズム運動」『はじめてのドラムサークル』音楽之友社, pp25-26(2014)